日本語の視点類型に関する研究
―“意義性の俯瞰的把握”を中心に―

社会科学研究科マネジメント専攻
佟一

論文要旨

認知言語学を含んだ広義の機能主義言語学は、言語現象の解釈、特に“WHY”についての解釈に長けているが、機能は普遍的な側面があるため、個別言語間の違いに関しては、普遍的な機能がどのように千差万別な言語事実を動機付けているのかという問題があり、伝統的な機能主義の方法論だけでは限界がある。

この弱点を補う研究分野の１つは視点研究である。従来の視点研究は広義の認知言語学の下位研究分野の１つとして、特に日本語と英語の対照を中心に盛んに行われてきたものであり、多くの成果を挙げてきた。中でとりわけ説得力が高く、広く運用されている理論の１つは主観性(主体性)のアプローチであるが、主観性(主体性)のアプローチは、①認知モードや主観性の違いがそのまま言語の違いに繋がるかという問題、②主観 vs.客観の二元論の問題、などの理論上の問題を抱えている。故に、“主観”“客観”の概念を用いないで、視点における個別言語の傾向性について主観性(主体性)のアプローチに劣らない解釈力を持つ理論的枠組が必要であることが分かる。

これを踏まえて、本研究は、“意義性の俯瞰的把握”という視点類型を提出し、中国語と英語と関連しながら、日本語における多くの個別性のある言語現象の成立の動機づけを統一的に解釈し、日本語の全体的な視点類型を特徴づけることを目的とする。

本研究の主な結論を以下のようにまとめる。

①“意義性”を、概念内容や表現行為が有意義であるという性質、またはその意義そのものだと定義し、“意義性の俯瞰的把握”とは、認識可能な各意義性の内容を同時に俯瞰するという意義性の把握の仕方であり、日本語の視点類型上の特徴として卓越している。意義性の俯瞰的把握は、意義性の主客合一性をそのまま再現する性質・主体自身は主体以外の全てとは一線を画す別格の存在として立ち現れるという別格性 ・主体が概念内容の利害性に敏感であるという利害志向性、といった基本性質を備えている。

②意義性の俯瞰的把握の主体は、ある概念内容に言語化に値する意義性があるかどうかを常に計算し続けており、言語化に値する意義性がない場合は言語化しない。また、異なる具体的な状況において異なる意義性を持つ自己を同時に俯瞰している。その結果、言語表現は話し手自身についてのものであることが明白な場合は話し手自身を言語化しない傾向があり、また実際に言語化する場合、状況・身分などに応じて、異なる自称詞を用いることになる。また、意義性の俯瞰的把握の主体は、自己を他者のように俯瞰的に把握し、常に自己の意義性を計算する傾向がある。

③意義性の俯瞰的把握の主体の別格性により、主体とそれ以外の全ては、別々のレベルの存在だと認識されることになり、この 2 つのレベルの対立を際立たせるマーカーが「られる」であり、この意味プロトタイプからの拡張により、自発・可能・受動・尊敬の 4 つの用法が成立したと思われる。「られる」の意味プロトタイプは、事態が意義性の俯瞰的把握の主体ではなく、主体の外部に発生し、主体による力的作用がないことが際立つ意義性であることをマークすることである。意義性の俯瞰的把握の主体による力的作用がないという意義性により、主体が事態の力的作用によって圧倒される場合と主体の存在自体が捨象される場合に分けられる。

④他にも、意義性及び意義性の俯瞰的把握の概念で解釈可能な言語現象が日本語に多数存在している。